



『吾、たたくめらるるよじつにぞし』

真宗大谷派 妙正寺住職 小栗栖法秀

阿闍世の煩悶に於いて、釈尊の月愛三昧による慰光は、実質上、阿闍世の教化者であるべき筈の耆婆を、救済した。耆婆は、阿闍世の異母兄弟であり、王位継承の順位にありながら、自らその地位を捨て、医師として、王家を維持し、深く仏法に帰依していたのである。しかしながら、王家の親子問題に際し、骨肉の苦悩は倍増し、その深さは、實際、阿闍世の比ではなかったと思われる。親鸞の注目は、當時既に王位に在った阿闍世の救済に際し、この親子問題の経緯を熟知し、既に、深く仏法に帰

依していた耆婆が、この光に目覚めた一点にあり、これこそが阿闍世をして、釈尊の許に導いた、最大原因であると見ている。よって、親鸞の信仰内容は、阿闍世の獲信内容というよりも、寧ろ、耆婆の自覚内容にあると言つても過言ではない。これを看過すれば、真宗の教化はその本質を迷失する。つまり、教える側に於いては、真宗の教化は成立しない。教える側の値仏に於いて以外に、教えられる側の値仏はない、ということである。真宗の教化の方針は、唯、この一点に在るといえよう。

日本国憲法 第9条

思い立つのではなく
うながしの前に
立つのだ

日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

進んで、阿闍世の獲信内容もまた「我常に阿鼻地獄に在りて、無量劫の中にもろもろの衆生のために苦悩を受けしむとも、もつて苦とせず」、つまり、永遠に救済なき我が身に於いて、永遠に如来の光に遇うてゆく、大地への立脚である。そしてその大地を釈尊は「大王、今より已往に、常に當に菩提の心を勤修すべし。何をもつてのゆえに。この因縁に従つて、當に無量の悪を消滅することを得べきがゆえなり」と。つまり、これから先の未来にはなく、既に経過して今日に至つた、お前の過去にこそある。今、お前の居る、執務すべき事が山と在る、此処こそがその大地なのだ、と述べている。

Verily, verily, I say unto you, Except a corn of wheat fall into the ground and die, it abideth alone: but if it die, it bringeth forth much fruit. (John 12:24)

(真実、真実。我、汝に告げん「一粒の麦の種が、大地に落ちて、そして、死ぬ、ということを除いては、それはただ孤独を我慢して滞在するのみである。しかし、もし、それが死ぬならば、それは、澤山の果実を齎す」と。)

自らが光に遇うてゆく以外に教化方法のない宗旨こそ、真実の宗旨であり、我々が救済されてゆく道も、そこにあるのです。平和憲法の根本義、また、平和憲法の実践義もまた、そこにあるのではないのでしょうか。

第4回 公開講座のお知らせ

日時 5月末予定

講師 伊勢崎賢治さん

1957年、東京生まれ。早稲田大学大学院理工学研究科修士課程終了。インド留学中、スラム住民の居住権獲得運動に携わる。国際NGOに身を置きアフリカ各地で活動後、東チモール、シエラレオネ、アフガニスタンで紛争処理を指揮。現在、東京外国語大大学院地域文化研究科平和構築紛争予防学講座(PCS)教授。著書に『インド・イスラム・レポート』『東チモール県知事日記』『武装解除 紛争屋が見た世界』などがある

原理主義とは何か

日本アラリアンス教団 大分キリスト教会副教師 永井一匡

前号に続き、原理主義についてのレポート後編。始めにおさらい。

【原理主義のイデオロギーと組織の特徴】

イデオロギーの特徴

- ①近代化に抵抗しつつも影響を受け、利用する
 - ②宗教教義を選択的に用いて思想を構築
 - ③善悪二元論的な世界観
 - ④聖典の無謬性を主張
 - ⑤終末観的世界認識と救世思想で人々をおり立てる
- 組織の特徴**
- ①選民思想
 - ②組織の内と外の明確な区別
 - ③カリスマ的指導者の存在
 - ④厳格な規律、行動規範。

『テロと救済の原理主義』より

(第三章)

スリランカの民族紛争

人口七三%のシンハラ人(九四%仏教徒)と一八%のタミル人(八五%ヒンドゥー教徒)の闘争が続く。

現在までに、六万人を超える人が犠牲。

宗教間対立ととらえる見方もあるが、仏教とヒンドゥー教の境は不明確で、宗教間摩擦が起きる可能性は、もともとは低かった。この境界線にダルマパラが直線を引いた。

民族アイデンティティ強化

彼は、西洋に反発を感じつつ、劣等意識にさいなんだ。そこで、彼は、シンハラ人がヨーロッパ人と同じアリア系の先住民族であるとの説を利用した。

ドラヴィダ系タミル人を劣等民族と規定することで自らの民族アイデンティティを強化し、精神的苦悩から逃れる術とし、自らの誇りを回復しようとした。

ダルマパラ思想の原理主義的特徴

本来仏教の開祖ブッタは、政治の世界から身を引いたのだから、原点回帰するなら政

教分離のはず。

しかし、ダルマパラは、シンハラナシヨナリズムを結び付け、選択的に聖典を絶対化し教義化した。

内⇨シンハラ人⇨正当仏法者、外⇨タミル人⇨邪悪な敵という善悪二元論的歴史観を持ち、現実はずしも対立していなかった多様の歴史、伝統を単純化、善悪二元論化して国の統治イデオロギーに利用した。

それは、強力に布教活動を進めるキリスト教勢力に対する、仏教側の抗議(抗近代)だった。

その一方、キリスト教布教組織をモデルに組織を改革(近代化の利用)。

その後、アニミズム土着宗教や他宗教に寛容で習合的な従来の仏教を弾劾。

在家の人にも作法、マナーを定め、近代の教養を身につけさせ、社会の近代化を担い

つつも伝統社会から切り離されアイデンティティ不安に揺れていた新興中間層の求めに応え、彼らの内面生活と社会生活を調和しうる、新しい

「伝統」を創出した。

(第四章)

田中智学による日蓮主義

戦前、日本を動かした宗教運動。国柱会の創設者田中智学らによつて組織化。政教一致の実現を掲げる。宗教、政治、軍事、社会、文学など様々な分野に影響。既存の他宗派を排撃。

摂受と折伏

日蓮は、無智が満ちている時は摂受(相手の主張に耳を傾けながら寛容に教え導く立場)を、邪智の者が多い時は折伏(相手を議論において攻め立てて邪見を取り除き、屈服させる積極的)に教え導く立場)を用いよと両方を認めている。

智学の日蓮解釈

一方、智学は、日蓮の教えの中核は折伏と考えた。ブツダ入滅後、世界は退歩しているという歴史観に基づき、末法の世に摂受は受け入れられず、折伏以外にないとした。

日蓮主義の主張

西洋キリスト教国⇨邪智誘国と認定。日蓮を輩出した日

本こそ真の仏道の国とし、日本の優位性を説き、西洋文明の圧倒的力の前に自尊心を保った。

日蓮仏教の国教化を主張。世界人類を法華経によつて統一すべき天職を日本が有するとした。

こうして国体イデオロギーに日蓮を再解釈して適応した。

日蓮主義の特徴

智学は、急速に近代化を遂げていく中で大きく社会が変化し、従来の血縁、地縁社会から切り離されて揺れる都市部の中間層である、医師、軍人、文官、弁護士などを中心に国柱会を組織。

自己と社会の関係性を提示し、国家共同体の中に自己の存在意義を確かめさせた。

また、活字メディアを通じて教化活動などキリスト教的宣教師法を取り入れた(近代化の利用)。

政財界の要人を一殺多生というテロで暗殺し、国家改造を企てる組織血盟団、五・一五事件など、大正中期から昭和初期に生まれた知識層の誇り

と不安を吸収するように日蓮主義運動は拡大した。

宮沢賢治

宮沢賢治も熱心な国社、日蓮主義者。文学を通じて仏の道を説き人々を教化しようとした賢治の実践も、テロによる国家改造を企てた血盟団の行動主義も、源流は法華經にたどり着く。

一つの教義から普遍的な救済が、一方は文学という表現によって語られ、一方はナシヨナリズムと結びついた暴力がテロという形で発生した。

利用された利他主義精神

賢治は「雨二モマケズ」を病床で手帳に記し、発表するつもりはなかった。しかし、第二次大戦中、大政翼賛会に利用された。賢治の利他主義には左右いずれからも政治利用されやすい危うさがある。

賢治と血盟団の青年に共有するものは、やり場のない孤独感とそれゆえにふれあいを求める気持ちが強かった点。よく生きたいと願いつつも殺人テロを決行するところまで行き着いた青年たちの心根

は、賢治の文学に感動する心とかけ離れていない。

仏教的慈悲に満ちた賢治文学を支える利他主義の精神は、一つ間違えば人間を疎外する危険なイデオロギーに転化する危うさを秘めている。

(第五章)

内なる原理主義

自爆テロの政治性

実行組織が追求する政治目的の共通点は「自国」「故郷」とみなす領土が、現在外国勢力等によって侵略、占領、支配されているという認識に立ち、侵略者、占領者、売国奴を打倒し、駆逐するという目的を掲げる点。

自爆テロのエネルギー源

宗教ではなくナシヨナリズムこそが自爆テロのエネルギー源。宗教感情とナシヨナリズムを結合させることで民衆の支持を得、テロリストは殉教者として尊敬され、青年構成員が確保され、組織が維持される。テロリストが抱く利他的感情は彼らが生きる社会が、テロ行為を支持するかどうか、彼らが決意を固める

決め手。

テロ犯の非特殊性の表裏

自爆テロ実行犯たちの多くは、信仰心が強いとはいえないがまじめで責任感が強い人。その意味では、同じ人間として語る対話の糸口はあるはず。しかし、同時に、政治諸条件、社会的諸条件が合致するとき、膨大なテロリスト予備軍を世界は抱えているともいえる。

誇りの不平等

世界には貧富の差だけではなく、誇りの不平等が存在する。それを放置して経済的側面のみをとられ、相手の誇りを無視して、一方的な経済援助や民主化を進めると、かえって事態を悪化させる。

アイデンティティの喪失感を埋めるあいまいな誇り
従来の社会を支えてきた地縁、血縁、共同体に対する忠誠心、連帯感、一体感が、近代化、グローバルゼーションに伴う社会の構造変化の中で解体しつつある。その中で、実体の伴わないあいまいな誇りが、人々のアイデンティティの喪失感を埋める形で

形成され、これが人々を暴力に向かわせる危険な状態を生んでいる。

他傷による自己保全

余裕のない状況にあつて、人々は他者に対する寛容性を失い、敵意を募らせる。他者の誇りを傷つけることで自らの誇りを確認するという痛ましい状況が生まれる。

自己の存在不安に忍び寄る影

これまで個人に安らぎと誇りを与え、社会に安定をもたらしてきた結合が見失われ、地縁、血縁社会から放り出された青年たちは、世界における自らの存在意義について悩み、不安にとらわれている。

こういう状況にあつて、過去を美化し、集団に対する忠誠心を誇張し、異なる価値を持つ他者に対する暴力を説く過剰結合が、若者の心に忍び寄る。

救済と結びついた自己破壊願望

内なる原理主義

市場原理による競争が激化する中で、誰もが自分はその時代から取り残されているのではないか、見捨てられるのではないか、そんな自分とは何か、

人生の意味とは何か、というアイデンティティ不安を抱えて生きていかざるを得ない。市場原理に基づく競争社会にあつて勝者であるためには、常に発展、成長していかざるを得ない。それゆえ、いかに愛しい記憶であつても、発展の阻害となる過去は切り捨てなければならぬと思つてしまう。「よく生きたい」「人

のために生きたい」と願う無垢な利他主義の精神を持った若者の一部がテロという破壊に身を委ねていくその心の奥底には、救済と結びついた自己破壊願望が隠れているのではないか。我々の胸中に潜む「内なる原理主義」とは、過去を否定して未来に向う「近代」という世界を生きるしかない人間の自己破壊願望の表れなのかもしれない。

私見:

参考文献はどれも原理主義をよく整理しており、私にとつても良い学びになった。レポートはその一部紹介だったが、文献には共通の問題点も感じた。学習会で提起

したその点と、その後の意見交換とを合わせてまとめる。

一、文献に感じた問題点

①原理主義と宗教、特に、聖典主義との相違のあいまいさ

聖典を強調する点で両者は共通のようだが、原理主義は、自分たちの思想を正当化するために、聖典を部分的に都合よく選択し、原点復帰を主張しつつ、実は原点をゆがめている点で、両者は異なる。

また、(狭義の)原理主義は排他的だが、本来、宗教、聖典主義は、排他的ではない。

例えば、キリスト教においてイエスは、イエス・キリストは、敵対者にも福音を述べ伝え続け、自分を迫害するものを愛せよと教えた。

本物の信仰は、他者を排斥せず対話し説得をめざす。この点でも両者は異なる。

しかし、どの参考文献も、宗教者||原理主義者、聖典主義||原理主義という誤解を否定し切れていない。私たち宗教者は、この点を明確にする必要がある。

②自分の立つ視座

また、各文献は、自分は、非原理主義者、リベラリストというところから論じているが、原理主義的ありようは全ての人の心に潜んでいると

いう認識に立つた視座が必要と思われる。

誰もが、周囲との差異に不安を持つ。その時、安易に、わかりやすく、正しそうな、都合のよい考えで誇りを保とうとする。これが優越意識につながる。さらに過剰防衛を起こし、異なる他者を否定、排斥し、攻撃を正当化し、原理主義となってしまう。

自分のコミュニケーションの目的が、理解の共有なのか、安易な自己肯定の押し付けなのかの吟味が必要となる。

私自身、自分の日常を振り返るとまったく情けない。しかし、それは、おそらく私だけが特別なのではなく、誰もがかかえることなのではないだろうか。

二、私たちの課題

人は、目の前の不安だけではなく、不安に思わなければならないような状態に自分をさせた過去と、そして、不安に際して、原理主義的になっ

てしまふもうい自分に向き合わなければならない。

しかし、そこで、不安や過去やもろい自分を否定するのではなく、それらに向き合い、過去から連続した現在、そしてそれに続く未来を向いて生きることの大切さを今回の学びを通して改めて思わされた。

自分にとつて不都合な過去や、安易な原理主義的解決を求めるもろい自分に向き合うことが課題なのである。

その時こそ、私たちは、自己義認に立つことを止めなくてはいけない。その時こそ、私たちは、絶対者の救い(キリスト者にとってはイエス・キリストの十字架)によって、その不都合なまاضي過去が赦され、その支え(内在)によってもろい自分にも希望が与えられ、弱いありのままの自分にも、本物の誇り、生きる力が与えられることを知る時なのだ。

違いに対して排斥するのか、対話するのか。対話で、相手を打ち負かすのか、理解を求めるのか。自分には原理主義的な面はないという視座で関わるのかそうでないか。自分の本物の誇りとは何なのか。そうした自分と向き合うことは、私たち宗教者九条の会・大分において、憲法九条、平和の問題を考える上で、棚上げにできない課題であろう。

ともすれば、対立、その後、争いになると思われている宗教的立場の相違。それが相違する者が集っている私たちの会。そこにおいて、その相違にどう向き合って九条に関わる問題を分かち合えるかが問われる。

この学習会は、公開討論会の形を取りますので多数の参加者を募集し、自由な意見交換を求めます。

『今を語ろう』連続談義

この学習会は、公開討論会の形を取りますので多数の参加者を募集し、自由な意見交換を求めます。

第六回 2月28日(木) 2時より

テーマ 「日蓮と平和」

コメンテーター 掛橋泰定

会場 大分キリスト教会

大分市城崎町2-1-6-22

電話 097-1532-4240

会費・カンパ どうもありがとうございました。
立川教洋・首藤順子
石光順照・松屋寺(敬称略)

宗教者9条の会・大分 事務局

〒879-5102 由布市湯布院町川上 3561 見成寺

TEL 0977-84-2257
FAX 0977-84-5203
年会費 3,000円

郵便振替口座 01720-1-111731

編集後記

境内の梅の花につがいのメジロが遊びに来ています。少しずつ春の訪れを感じています。

靖国問題に関連して、靖国神社第六代の宮司松平永芳について調べています。A級戦犯合祀の張本人として、昭和天皇から「あの馬鹿者」とまで呼ばれ、中曽根首相からも疎まれた存在です。

前任の宮司は平和主義者で、厚生省から打診のあったA級戦犯の名簿を宮司預かりとしていたそうです。(今回は編集後記枠が小さいので、続きは次回掲載します E)